

一章 救いの聖女と、微笑む毒蛇

王宮の「太陽の間」は、目も眩むような黄金の光に満ちていた。

シャンデリアの輝き、高級なシャンパンの香り、そして何より、私に向かわれる熱狂的なまでの賞賛。

「オーレリア様！ あなたこそ聖女です！」

「あなたのおかげでこの国は救われました！ 本当に……ありがとうございます……！」

数年前、この国を襲った「灰死病」のパンデミック。

「いいえ……私はできることをしたまでです」

六年前に、私は前世……生前の記憶を思い出した。

この世界は、乙女ゲームの世界だということを。

そして自分自身が、「悪役令嬢」として処刑される運命を。

そこからは、ゲームの知識を総動員して、特効薬の製法を導き出し、私財を投げ打って街を救ったことで、私の呼び名は「悪女」から「救世の聖女」へと変わった。

（どうしよう……こんなことになるなんて……！）

本来のヒロインであるリリアも毒殺から救い、彼女と第一王子との恋を成就させた。

かつて私を軽蔑していた攻略対象たちも、心からの忠誠、または親愛を向けてくれている。

何も問題がないはずだった。

「オーレリア、君こそがこの国の真の光だ」

誇らしげに語るのは、第一王子のギデオンだ。

かつて、私を処刑台へ送るはずだった男。

その隣では、リリアが瞳を潤ませて私の手を握っている。

「本当におめでとうございます。オーレリア様の幸せを、私たちが一番願っていたのですよ」

その背後には、寡黙な近衛騎士団長や、気難しい宰相までもが、満足げな笑みを浮かべて控えている。

彼らだけではない。

この広間に集まった貴族たち全員が、私を「完璧な幸福」へと押し上げようとする熱狂の共犯者だった。

そこへ、国王陛下が気品に満ちた足取りで壇上に上がった。

「皆のもの、聞け！ 我が国の至宝、オーレリア。彼女の献身に報いるため、余は最高のご褒美を用意した」

期待に満ちた静寂が広間を支配する。

私はこれから発せられる言葉を知っていた。

しかし、なすすべはなく、心臓を握りつぶされそうになりながら、陛下の言葉を待つしかなかった。

「オーレリアを我が王家の正式な一員として迎える。——第二王子ヴィンセント。彼こそが、これまで陰ながらオーレリアの慈善事業を支え続けてきた最大の理解者だ。本日、二人の婚約をここに正式に宣誓する！」

割れんばかりの拍手が巻き起こった。

「素晴らしい！」「なんてお似合いなんだ！」「病弱なヴィンセント殿下を支えられるのは、慈愛深い彼女しかないない！」

私は、目の前が真っ暗になった。

視線の先には、陛下の傍らで一步前に出たヴィンセント殿下がいた。

柔和な微笑み。

優しげな雰囲気を通り越して、不自然さ感じるほどに。

「ヴィンセント殿、下……」

彼は第一王子のように華やかな武勲があるわけでも、強大な魔力があるわけでもない。

いつも図書室の隅で書物を読んでいるような、無害で穏やかな、空気のような存在。

今回の断罪回避にいたるまで、彼はその豊富な知識を活かしてサポートしてくれた。

だからこそ、誰も疑わなかった。

彼が、私が救った「平和な世界」の裏側で、どんな糸を引いていたのかを。

「……っ、陛下、私は……」

辞退の言葉を口にしようとした私の肩を、背後からギデオン王子が優しく叩いた。

「オーレリア。ヴィンセントから聞いたよ。君をずっと慕っていたと。彼は目立たないが、誰よりも深く君を見守っていたんだ」

「そうですよ、オーレリア様！ 殿下なら、オーレリア様を誰よりも大切にしてくださいます！」

リリアの無垢な笑顔が、今は鋭い刃となって突き刺さる。

救ったはずの彼らが、恩を返そうとする彼らの善意が、私を逃げ場のない崖っぷちへと追い詰めていく。

ここで拒絶すれば、私は「王家の慈悲を無下にする傲慢な女」に逆戻りだ。

私が積み上げてきた聖女の虚像が、私自身の首を絞める縄になる。

「さあ、オーレリア」

ヴィンセント殿下が、滑らかな動作で私の前に立ち、その白い手を差し出した。

「ようやく、公の場で君の手を取ることができました。……本当に、長かった」

彼が私の指先をすくい上げた瞬間。

血管を冷たい毒が駆け巡るような、猛烈な寒気が全身を襲った。

「……殿下……私……！」

顔を上げると、至近距離に彼の瞳があった。

周囲からは歓喜に満ちた、愛情深い眼差しに見えるだろう。

だが、私に向けられたその瞳には、微塵の体温も宿っていない。

「……死ぬまで、離しませんよ」

ささやきは、拍手にかき消されて誰の耳にも届かない。

私だけが、底なしの沼に沈んでいくような感覚に震えていた。

周囲のキャラクターたちが「よかったね」と笑い合うその中心で、私ひとりが、自分の生涯が殺されるための祭壇に立っていることに気づいてしまったのだ。

最初は、彼のことが苦手な、具体的な理由はなかった。

彼に視線を向けられると、本能的な恐怖で身がすくむ。

光を感じさせないような瞳が、怖いと感じる。

それだけだった。

しかし、その恐怖を確信させるできごとが、婚約発表前に起こってしまった。

その出来事は、「不幸な偶然」として片付けられるはずのものだった。

私とヴィンセント殿下、そして第一王子ギデオンとリリアの四人は、穏やかな午後の光の中にいた。

給仕をしていたのは、まだ慣れない手つきの若い侍女だった。

彼女が銀のトレイを捧げ、沸き立つような熱い紅茶が入ったポットを運んできた、その時。

——カッ、と。

私の隣に座っていたヴィンセント殿下が、ほんの数ミリ、椅子を引いた。

あるいは、靴の先を動かしたただけだったかもしれない。

隣にいた私にさえ、それは彼が座り直しただけの、無意識の動作に見えた。

けれど、その次の瞬間。

侍女の足先が、まるでそこにあるはずのない何かに絡め取られたかのよう、不自然に揺らいた。

「あ——っ！？」

均衡が崩れる。

銀のポットが宙を舞い、中からこぼれ出した紅茶が、侍女自身の腕へと降り注いだ。

「きゃあああああ！」

悲鳴が上がり、庭園の平穏が切り裂かれる。

侍女はトレイを落とし、腕を押さえてその場に崩れ落ちた。

ギデオンたちが驚いて立ち上がる中、誰よりも早く動いたのはヴィンセントだった。

「大丈夫かい！？　すぐに冷やさないと。誰か、冷たい水と氷を！」

彼は迷いなく、侍女の傍らへと膝をついた。

その手つきは驚くほど優しく、気遣いに満ちている。

侍女は涙を流しながらも、「申し訳ございません、私の不手際で……！」と、自分を責めて何度も謝罪した。

そう、彼女は自分が「つまずいた」のだと、自分自身の足がつれたのだと信じ切っていた。

周囲にいた騎士も、侍従も、誰も彼を疑わない。

それどころか、真っ先に介抱へ走った彼を、「なんと慈悲深い王子か」と称賛の眼差しで見つめている。

——けれど、私は見てしまった。

侍女が倒れ込む直前。

ヴィンセント殿下の唇が、ほんの、わずかだけ。

獲物を狙い通りに罠に嵌めた狩人のような、完璧に冷淡な弧を描いたのを。

彼は介抱しながら、ふと私の方を振り返った。

その顔には、心配そうに眉を寄せた「聖人の微笑み」が貼り付いている。

だが、その瞳だけが、私にだけ語りかけていた。

『——ねえ、見ていたんだろう？』

声にならない声が、私の心臓を凍りつかせる。

彼は偶然を装って、他人の人生を、肉体の痛みを、その場の空気さえも完全にコントロールしている。

それは力による支配よりも、もっとおぞましい何かだった。

きっと私との婚約も、裏で糸を引いていたに違いない。

しかし、なぜ？

なぜ、彼は私と結婚したいと思ったのだろうか。

「オーレリア、顔色が悪いね。君は心優しいから、彼女の怪我に心を痛めているのだろう？」

「殿下……貴方は……」

彼は立ち上がり、私の震える手を包み込んだ。

紅茶の蒸気よりも熱く、それでいて死者のように無機質な手のひら。

「心配いらないよ。僕が責任を持って、彼女には最高の治療を受けさせ、休養を与えるように手配するから。……ねえ、僕を信じて？」

信じられるはずがない。

この一連の出来事は、彼の仕業だと頭が警鐘を鳴らす。

この男にとって、世界は自分の望む筋書き通りに動くべき舞台でしかなく、私たちはその上で踊らされる人形に過ぎないのだ。

確信が、逃げ場のない毒となって私を浸食していく。

そして婚約が決まり、式の前夜、彼は最後に残った「希望」すらも嘲笑うように奪い去った。

「……そういえば、あの侍女は、影で君の悪口を言っていたそうだよ。『何か』に足を引っ掛けて、『ああなっても』当然のむくいだろうね」

二人きりになった回廊で、彼は私の耳元に唇を寄せた。

「ところで、気づいていたかい？」

彼はもはや隠す気もなく、柔和な微笑みとは真逆の、水底のような暗さで薄く笑った。

「君がリリアを助けたあの毒殺未遂も。悪女として陥れかけたのを何とか回避できたのも。……全部、僕が裏で整えてあげたんだよ。君が『幸せな結末』を信じて、一番無防備に喜ぶその瞬間を待つためにね」

「……………！」

私が必死につかみ取った幸福は、最初からこの男の手のひらの上で転がされていた偽物だった。

「さあ、明日からは僕の中で、精一杯『幸せな妻』を演じてもらおうよ。……返事は？」

あごを強く持ち上げられ、鏡のような瞳に閉じ込められる。

私は、もはや震える唇を噛み締めることしかできなかった。

二章 初夜の蹂躪

王宮の最奥、滅多に部外者が立ち入ることのない離宮の寝室。

豪華な装飾がされた扉が、音も立てずに閉ざされた。

カチリ、と。

鍵が回る小さな音が、私の鼓膜には死刑宣告の鐘のように響いた。

「……お疲れ様、オーレリア。今日からここは、君の新しい世界だ」

背後からかけられた声には、もうあの「柔和な王子」の面影は微塵もなかった。

私は震える肩を抱き、振り返ることさえできない。

視線の先にある大きな天蓋付きのベッドが、まるで巨大な怪物の口ののように私を待ち受けている。

「ようやく面倒で億劫な式が終わったね」

ヴィンセントは無造作に上着を脱ぎ捨て、贅を尽くしたソファに深く腰を下ろした。

彼はテーブルに置かれた瓶から毒々しいほど赤いワインをグラスに注ぎ、一気に煽る。

「……ヴィンセント殿下」

「その呼び方はもういいよ。誰も見ていない。呼び捨てでも、愛称でも、なんでもいい……ああ、肩が凝る。君の、そして周りが好む『優しい王子』を演じるのは、予想以上に骨が折れた」

彼はグラスを置いて立ち上がり、獲物を追い詰めるような足取りで私に近づいてきた。

逃げようとした私の背中が、冷たい壁にぶつかる。

逃げ場はない。

「怯えるなよ。君は賢い。……いや、賢すぎるほどだった。ありとあらゆることを先回りし、難事も解決していくさまは……まるで神の予知のようだった」

彼の手が、私の頬をゆっくりとなぞる。

冷たい指先が這うたびに、全身が凍りついていく。

彼は私が「転生者」であることなど知らない。

けれど、私が「何か」を知っていて、死に物狂いで運命を変えようとしていたことだけは、完全に把握していたのだ。

「君が必死に『破滅』を避けようと走り回る姿を、僕は特等席で眺めていた。……滑稽だったよ。まるで、見えない何かに怯える小動物のようで。だから、少しだけ手助けしてやったんだ。君が信じる幸せな結末という名の、僕専用の箱庭を完成させるためにね」

「……っ、貴方は、最初から……！」

「そう。君が救った人々、君が築いた名声。それらすべてが、君をここへ縛り付けるための鎖になるように仕組んだ。今さら誰かに助けを求めるかい？ 誰も来ないよ。彼らにとって、僕は『君を幸せにする最高の夫』なのだから」

ヴィンセントの瞳が、暗い愉悅に細められた。

彼の手が、私のナイトドレスの胸元にかけられる。

ビリ——ッ！

細やかな刺繍がほどこされた高価なシルクが、彼の暴力的な力によって悲鳴を上げた。

「——いやっ……何を……！」

「さあ、始めようか。君が大切に守り抜いてきたその『聖女』の皮を、一枚ずつ削いでやる」

幾重にも重なるレースとシルクが、無残に床へと散らばっていく。

私の体を唯一守っていた、最上の手触りをした薄い衣。

それが、彼の手によってただの布切れに変えられていく。

「やめて……っ、離して！」

抵抗して暴れる私の両手首を、彼は片手で容易く捻り上げ、頭上の壁に押し付けた。

金属の枷のような力。

病弱という話が、いかに完璧な嘘であったかを思い知らされる。

「嫌？　だが、これは君が望んだ結果だ。僕との結婚を受け入れ、この部屋に來たのは君自身だろう？　それとも、僕を説得しようとも思っていたのか？」

彼の顔が至近距離まで迫る。

香水の澄んだ香りと、冷酷な男の匂いが混ざり合い、思考が麻痺したように止まる。

「君がどんな『予知』を持っていようと、僕の腕の中からは逃げられない。……今日ここで、君の心も体も、僕の所有物であることを刻みつけてやる」

彼は私をベッドへと手荒に放り投げた。

無情に沈み込むマットレス。

逃げようとする私の手をつかみ、彼はその上に覆いかぶさってくる。

「ひ……っ！」

そこには、情熱も、愛も、慈しみもなかった。

あるのは、圧倒的な支配欲と、目の前の女を屈服させようとする冷徹な意志だけだ。

「……っ、あ……！」

彼の唇が、首筋に深く吸い付く。

それは愛撫ではなく、領土を主張する支配者の印。

痛みに涙があふれるが、彼はそれをぬぐうこともしない。

むしろ、その涙を愉しむように、わざと荒々しく私の肌を赤い痕で汚していく。

「やめて……やめて……！」

私が今まで、どれほどの努力をしてきたか。

どれほどの恐怖に耐えて、この「平和」を守ってきたか。

そのすべてを、彼は嘲笑っている。

「いい声だ、オーレリア。……もっと鳴け。君が救った国民たちが、今の君の声を聞いたらどう思うだろうな？」

「……ひ、どい……あなたは……っ」

「ああ、酷い男だよ。だが、そんな男を選んだのは、君が作り上げたこの『幸福な世界』だ」

ヴィンセントの指先は、愉しむように、ゆっくりと私の肌を這い回った。

それは慈しむための愛撫では断じてない。

どこを、どんな角度で、どれほどの強さで押さえつければ、この「聖女」という名の虚飾が崩れるのか。

その最適解を探り当てるための検分だった。

「……っ、やめ……いや……」

「本当にそう思ってるのかな。ほら、ここ、気持ちがいいだろう？」

彼の愛撫が、私の胸のふくらみに届く。

双丘を撫で回し、形が変わるのを楽しむように揉む。

「んっ——！　うう……」

彼は手を止めることなく、今度は胸の突起を指で弾く。

「ひあああ——」

熱を帯び始めた私の吐息が、彼の白い胸元に散る。

「ふふ、まだ胸を触っているだけなのに。いい声を漏らすじゃないか。……それじゃ、今度はこっちを愛でてあげようか」

氷のように冷たい指が、ナイトドレスの残骸を押し分け、太ももの内側——誰にも触れさせたことのない、私自身でさえ意識することを避けてきた柔らかな皮膚へと食い込んでいく。

「いや……！ 触らないで……！」

その感触は、這い回る蛇のように離れない。

ミリ単位の遅さでじりじりと這い上がってくるたびに、神経に鳥肌が立つような戦慄が走る。

そして、愛撫の刺激で、蜜をたくわえ始めた秘所を指先でもてあそんだ。

「——ううっ！ や、いやだ、やめて！」

拒否の言葉を嘲笑うかのように、ヴィンセントは秘所の先端をもてあそび始めた。

「あ……ん！」

腰がビクリと震えるほどの、未体験の快感。

自分の口から漏れ出た嬌声に、顔が羞恥で赤くなる。

「ほら、見てごらん。君の身体は、あんなに必死に紡いだ拒絶の言葉を、一文字も覚えていないようだ」

ヴィンセントが、私の耳を湿った舌でなぞりながらささやく。

「ふ……うあ！」

彼の瞳は、至近距離にありながら驚くほど冷えていた。

恍惚に染まることもなく、ただ一点の曇りもなく、私の瞳の揺らぎや、跳ねる指先の動きを観察している。

彼に見つめられることは、顕微鏡の下で身を動かす虫になるのと同義だった。

「ん……！ ひう……！」

拒絶したい。

この手で彼の胸を突き飛ばし、この最悪な夜から逃げ出したい。

「あ……う……んん！」

心はそう叫んでいるのに、身体は、私の意志を嘲笑うように裏切っている。

彼の手が、私の熱を貪る代わりに、おぞましいほどの「悦び」という名の毒を注ぎ込んでくる。

触れるか触れないかの、羽毛のような、それでいて確実な刺激。

「ん！ ふう……んっ」

蕾を愛撫し、快楽を無理やり引き出した。

極限まで焦らし、私の理性が悲鳴を上げるまで、その「不快なまでの甘さ」を繰り返す。

「……ああ……、あ……んっ……！」

喉の奥から、自分のものではないような、淫らで情けない声が漏れ出た。

その瞬間、ヴィンセントの瞳に、今日初めての——そして最悪の、濁った光が灯った。

「清らかな聖女様が、そんな声を出すのか。……いいよ、もっと乱れて。君が守り抜いたその『未来』を、僕の指先でぬかるみに変えてやるから」

彼の舌が、私の涙をすくい上げる。

その感触は、逃れられない重い鎖のように感じられた。

私の肌は、彼の冷たい指を迎え入れるように、勝手に熱を帯び、湿り、脈打っていく。

「あ……だめ……あ、ああああ！」

自分が自分でなくなっていくような感覚。

彼に蹂躪されること以上に、彼の指先に翻弄されて、抗えない快樂に身を沈めていく自分自身の肉体が、何よりも恐ろしく、屈辱的だった。

ヴィンセントは、逃げようと仰け反る私の腰を、逃がさない強さで、獲物を捕獲するような手つきで引き寄せた。

「君の心なんて要らない。まずはその身体に、僕の名前を、僕の温度を、僕の支配を……決して忘れられないほど深く、えぐり込むように刻んであげるよ」

暗い天蓋の影の下、私はただ、彼という冷酷な観察者に暴かれ、解体されていくのを、絶望と共に受け入れるしかなかった。

「あ……ん……ふうう——」

拒絶したいのに、身体は彼の暴力的なまでの愛撫に抗いきれず、熱を帯びていく。

そのことが、何よりも自分自身を汚されているようで、吐き気がした。

「身体は、口よりも正直だね。……聖女様も、中身はただの女というわけか」

彼の冷ややかな嘲笑が耳元で響く。

私の純潔、私の誇り、私の積み上げてきたすべて。

それが、一瞬ごとに彼の指先で粉々に碎かれていく。

「……っ、ああ、あ！ ……いや……！」

私の足の中で、彼の長い指が鋭く、それでいて驚くほど正確に「そこ」をとらえた。

剥き出しの直接的な接触。

ピチャリ——。

あふれた蜜が、クリトリスにまとわりついて卑猥な音を響かせる。

「だめ……！ その動き……やめて……！」

容赦なく彼の指先が、私の体内に溜まった熱を掻き集めるように円を描き始める。

慈しむような愛撫などではなかった。

少しでも腰を浮かせれば、空いたもう片方の手で私の腹部を無慈悲に押さえつけ、ベッドに閉じ込める。

「君の『予知』には、今のこの光景も映っていたのかい？ 聖女様が、僕の指先ひとつで、こんなに無様に腰を震わす姿が」

耳元でささやかれる嘲りと言葉。

彼の指が、じりじりと圧を強めていく。

整えられた爪の先が、もっとも過敏な場所に触れるたび、私の脳裏は白い閃光で塗り潰された。

「ひああう！！」

一秒が永遠のように長く、快楽というよりは「暴力」に近い刺激が、絶え間なく、濁流となって私を飲み込んでいく。

「は……っ、あ……ああ……！！　だめ……きちゃう……！」

限界だった。

私の意志などとうに置き去りにして、身体が勝手に跳ねる。

「あああああああああ——ひううう——！！！」

視界が真っ白になり、喉が裂けるような声を上げた瞬間、全身の力が抜け落ち、私はシートの上へ崩れ落ちた。

激しい動悸と、目の前に散る火花の残像。

指一本動かす気力も湧かず、私はただ、泥に沈んだようにぐったりと横たわっていた。

「……まだ、終わらせるなんて言っていないよ」

けれど、ヴィンセントは、冷ややかな瞳で私を覗き込む。

彼は私の、汗と涙で汚れた顔をじっと見つめ、まるで不具合のない機械を点検するように、無感情にその指を動かした。

「ちゃんと中也確かめておかないとね……」

呆然とする私の脚を、彼はさらに左右へ大きく割り広げた。

「な、何を……！」

快樂の余韻で、まだ神経が過敏に脈打っているそこへ。

今度は、ためらいもなく「中」へと指が割り込んできた。

「っ……あ……！？」

先ほどまでの外側への刺激とは違う、内側を強引に押し広げられる異物感。

一度に二本、三本と増やされる指が、私の未熟な内壁を容赦なく引き伸ばし、「弱点」を探るように動き始める。

「く……るしい、……指……だして……っ」

「苦しい？ ……君の身体は、もっと欲しがっているように見えるけれど。ほら、こんなに熱くなって、僕の指を締め付けているじゃないか」

彼は私の内部を搔き回しながら、わざと指の関節を曲げ、壁面を執拗にこすり上げていく。

「ふぐう……う、やめ、あ……っ！」

ぐったりとしていたはずの身体が、その侵入感に、再び望まない熱を帯び始める。

中に入れられた指が、私の肉を内側からこねあげ、彼自身のものとして書き換えていく。

自分の内側に、自分ではない男の、冷たくて太い「支配」が入り込んでいるという恐怖。

「んうん……ふう……っいやぁ……！」

それが、逃げ場のない密室で、延々と、時間をかけて繰り返される。

「君がこれまで救ってきた世界。……その中心で、今、君の『聖女』としての純潔を、僕がこうして弄んでいる。……痛快だと思わないかい？」

「ひ、どい……どうしてこんな、こと……！」

「……そんなこと気にしている暇あるのかな」

彼の指が、くい、っと内側の壁をえぐるように撫でる。

「ん——！ や……いやだ……お願い、もうやめて……」

私が涙を流して容赦を願っても、動きをやめるところか楽しげに目を細めるだけ。

彼は私の表情の変化を、一点も逃さず網膜に焼き付けている。

「やめる？ 君のここはシーツを濡らすほどあふれているのに。僕の手で乱れるこの光景、しっかり覚えておくからね」

「見ない、で……なんで……私の、こんな……んんっ！」

蹂躪され、解体され、内側まで彼の指で満たされる。

私がこれまで守りたかった「プライド」「平和」が、彼が掻き回すたびに溢れる蜜と共に、一滴残らず流れ出していくようだった。

ヴィンセントは、私の内側を執拗に掻き回していた指を、不意に引き抜いた。

「ん……っ！」

「さて、準備は整ったかな。これくらいのほうが、本番をより絶望的にむかえられるだろう」

けれど、休息など与えられるはずもなかった。

ヴィンセントは膝を割り、私の脚をさらに高く、逃げ場を完全に塞ぐようにして自身の肩へと担ぎ上げた。

「……っ、ヴィンセント、殿下……もう、……」

経験がなくても分かった。

これから始まるのが、彼の本当の目的で、身体のすべてが奪われるということ。

「まだ、本当の『刻印』が終わっていないだろう？」

彼は自らの衣類をはね退け、私を貫くための準備を整える。

キャンドルの微かな光に照らされた彼の怒張した凶器は、これまで指で受けてきた刺激など、児戯に等しいと思わせるほどの威圧感を放っていた。

「ひっ……！」

それを目にした瞬間、私の喉は恐怖で引きつり、本能が「壊される」と警鐘を鳴らす。

「……だめ、……それは……っ」

「だめ？ 嫌かい？ だが、君のそこは……こんなに僕を招き入れる準備が
できているじゃないか」

彼は私の震える腰を、逃がすことを許さない強さでがっしりとつかみ取った。

先端が、熱を帯びた私の入り口に触れる。

指先とは比べものにならないほどの容赦のない質量と、猛烈な熱。

それが、私の柔らかな粘膜をじりじりと押し広げていく。

「ひ……っ、……あ……！」

指先で弄ばれていた時とは比較にならない、暴力的なまでの「重さ」が私を押し潰した。

ヴィンセントは、私が受け入れる準備ができているかなど、微塵も気にかけていない。

ただ、そこにある領土を踏み荒らす――。

彼の動きには、そんな無機質で事務的な冷酷さに満ちていた。

「あ……う、は……っ……！」

侵入してきたそれは、鈍い^{くさび}楔そのものだった。

熱を帯びた異物が、無理やり私の内壁を押し広げ、逃げ場のない奥底へと突き進んでくる。

「ひ……う……あ……っ」

指で解された程度では到底足りない。

裂けるような痛みが下腹部を走り、私は呼吸の仕方を忘れたように口をあえがせる。

「……っ、ヴィン、セント、殿下……痛、い……痛いです……やめて……っ」

涙が耳元へ、止めどめなく流れ落ちる。

けれど、彼は私の懇願を、心地よい音楽でも聴くかのような目で見下ろしていた。

「痛いのは当然だろう。君が『聖女』などという安っぽい看板を掲げて、誰にも触れさせずに守り抜いてきた証を、今僕が壊しているんだから」

彼は容赦なく、最後の一線を超えて私を貫いた。

「うっ、あああ——！！！！」

突き立てられた衝撃に、私の背中が弓なりに跳ねる。

「……入ったよ、オーレリア。……君の、一番奥まで」

彼は私の顔をじっと見つめながら、勝利を宣言するようにささやいた。
その甘く冷たい吐息が、鼓膜を震わせ、思考を麻痺させる。

「ふぐ……ひっ……いや、いやあ……！！」

温かな、けれどおぞましい「生」の感触が、私の最も深い場所を占拠した。

今までどんなフラグを折ろうとも、どんな未来を書き換えようとも、決して侵されることのなかった「私自身」という聖域が、たった今、この冷酷な観察者によって泥靴で踏みにじられたのだ。

「……ふ、う……」

ヴィンセントは、目的を果たした安堵のような溜息をひとつつくと、私の痛みを無視して腰を動かし始めた。

ぐちゅり。

私の初めての証と、混じり合った体液が混じり合う不快な音が、静かな寝室に響く。

「ふぐ……！　だ、め……動かない、で……！」

動かされるたびに、内側を太い杭でえぐられるような鈍痛が繰り返される。

私を支配しているのは、身体を引き裂かれる物理的な苦痛と、自分という存在が「ただの肉の器」へと成り下がっていく絶望的な感覚だけだ。

「は、……うっ、……あ……」

リズムを刻むたびに、肌が熱を持ち、ひりつく。

彼は私の顔をじっと見つめたまま、逃げることを許さない。

「どうした。……君が望んだ『幸せな結婚』だろう？ 誰も不幸にならず、誰も死なない……ただ、君一人が僕の所有物になれば済む話だ。これほど公平な取引はないと思わないかい？」

彼の言葉が、ナイフのように胸を切り裂く。

私が、この平和な世界を作り上げた。

その対価が、この暗い寝室で、たった一人、誰にも知られずこの男の「おもちゃ」として壊されることだったなんて。

「……あ、……う……」

「君がこれまで守り抜いてきた『清廉さ』も、『誇り』も。……今、こうして僕の『所有物』という名の汚濁に染まり、崩れ去った。……どうだい？ 聖女様が、僕の足元で無様に壊される気分は」

彼は私の涙を、指でキャンバスを汚すように雑にぬぐう。

その優しさのかけらもない行為が、逃れられない重い鎖のように感じられた。

「さあ、始めようか。君がこれまで『聖女』として積み上げてきた努力を、ひとつも残さず踏みにじってやる」

彼は私の腰をつかんだまま、ゆっくりと、本当にゆっくりと、腰を動かし続ける。

重く、太い、暴力的なまでの往復。

突かれるたびに、思考は粉々に砕け散っていく。

「……っ、う、……あ……」

呼吸をするたびに、腰が動くたびに、私の中で彼の一部がこすれる。

その微かな摩擦さえもが、今の私には耐え難い暴力だった。

彼は私の肩を両手で掴み、ベッドへと縫い付けるように強く押し下げた。

「ほら……どうだい、初めての男の熱は」

私を見下ろす彼の双眸は、一点の曇りもなく冴え渡っている。

情欲に溺れる様子など微塵もなく、ただ、実験動物の反応を観察する科学者のように、私の絶望に彩られた表情を精査していた。

「君の身体は、僕という異物を受け入れるためにこれほど悲鳴を上げています。内側が、僕の太さに合わせて無理やり広げられていく感覚はどうだい？」

彼はささやきながら、わざと、腰を気が遠くなるほどの遅さで引き抜いた。

ぐちゅり――。

粘膜がこすられる音が、静寂に沈んだ寝室に生々しく響く。

「ひ……っ、あ……ああ……！」

引き抜かれる瞬間でさえ、救いはない。

ひりつくような痛みが走り、私は反射的に逃げようとベッドをずり上がろうとした。

しかし、それは許されなかった。

彼は私の腰を鎖のような強さで再び引き寄せ、今度は先ほどよりも深く、重く、一気に沈み込んできた。

「ひぐ……っ！？ あ……はあ、っ……！」

奥の、一番触れられたくない、自分でも知らなかった場所にまで彼の熱が到達する。

内側から突き上げられ、肺の空気をすべて搾り取られるような衝撃。

突き立てられた場所から、痺れるような痛みが全身へと波及していく。

「あああああ！！　くる、しい……！」

「……まだ、一歩も動いていないに等しいよ。君はそんなに早く壊れてしまうのか？」

ヴィンセントの指先が、私の涙に濡れたまつ毛をそっとなぞった。

その動作だけを見れば、まるで愛おしい婚約者を労わる恋人のようだろう。

けれど、私に向けられた言葉は、どこまでも冷酷で、無慈悲だった。

「君がこの世界を救うために費やした、あの血の滲むような努力。……その尊い時間が、今、僕の動きひとつで無価値なものに書き換えられていく。……ああ、なんて美しいんだ。君の誇りが、僕の熱に侵食されて、溶けていく様は」

彼はふたたび、腰を動かし始めた。

今度は、円を描くように。

内側を執拗に広げ、めぐり、隅々まで自分の存在を刻みつけるような、まとわりつくような律動。

「ふ……ひぐ……ああ……っ」

突かれるたびに、私の視界が明滅する。

彼が動くたびに、太ももの内側を流れ落ちる自分の体液が冷たく感じられた。

自分が「聖女」として、一人の「女性」として大切にしてきたものが、徐々に崩壊していく。

「……あ、……う、……ヴィン、セント殿下……もう、……ゆる、して……」

「許す？ ……何をだ。君は何も悪いことはしていないだろう？ 君はただ、僕の望む通りに『最高の聖女』として振る舞い、僕の望む通りに『最高の獲物』としてここに横たわっているだけだ」

彼は私の首筋に顔を埋め、命を繋ぐ脈を確認するように深く吸い込んだ。
彼の熱い吐息が、汗ばんだ私の肌を不快に撫でる。

「いい香りだ。この淫靡な匂いを嗅いだのが、僕が初めてだと思うと、心底良い気分になるよ」

「う……うう……ひぐう……」

内側を搔き回される異物感は、時間と共に薄れるどころか、より鮮明に、より重く、私の意識を支配し始めた。

逃げたいのに、重力に逆らうこともできず、私はただ、彼が私の肉体を蹂躪し尽くすそのリズムに翻弄され続ける。

彼は、わざとゆっくりと、深く、重く、突き上げを繰り返した。

「は……っ、あ……ああ、……あああっ……」

喉が枯れるほどの声を上げて、彼は止まらない。

「ふふ。今の君を見て、『救世の聖女』だと思う人は、どこにもいないだろうね。ああ、とてもとてもきれいで、愚かだよ」

私の内側で、彼の一部分が熱く脈打っている。

その拍動が、私の魂を汚していくような気がして、暗い天蓋の影を見つめたまま、終わりのない苦痛の渦へと沈んでいった。